中世漆器の技術転換と社会の動向

Transition of Lacquering Techniques and Social Dynamics in Medieval Japan

四柳嘉章

YOTSUYANAGI Kasho

はじめに
❶各地で始まる漆器生産
❷渋下地漆器の登場と展開
❸加飾法の変化
❹赤色漆器の普及と社会の動向
❺食膳の構成
❻漆の採取法と量
❼漆器生産と荒型，木地，漆工具
❽漆器と樹種の選択
終わりに

［論文要旨］

本稿では中世的漆器生産へ転換する過程を，主に食漆器（椀皿類）製作技術を中心に，社会文化史的背景をふまえながらとりあげる。平安時代後期以降，塗師や木地師などの工人も自立の道を求めて，各地で新たな漆器生産を開始する。新潟県寺前遺跡（12 世紀後半～ 13 世紀）のように，製鉄溶解炉壁や食漆器の荒型，製品，漆刷毛，漆パレットなどが出土し，荘官級在地有力者の屋敷内における，鋳物師と木地・塗師の存在が裏付けられる遺跡もある。いっぽう次第に塗師や木地師などによる分業的生産に転換していく。そうしたなかで 11 ～ 12 世紀にかけて材料や工程を大幅に省略し，下地に柿渋と炭粉を混ぜ，漆塗りも 1 層程度の簡素な「渋下地漆器」が出現する。これに加えて，蒔絵意匠を簡略化した漆絵（うるしえ）が施されるようになり，需要は急速に拡大していった。やがて 15 世紀には食漆器の樹種も安価な渋下地に対応して，ブナやトチノキなど多様な樹種が選択されるようになっていく。渋下地漆器の普及は土器埦の激減まねき，漆椀をベースに陶磁器や瓦器埦などの相互補完による新しい食膳様式が形成された。漆桶や漆パレットや漆採取法からも変化の様子を取り上げた。禅宗の影響による汁物・雑炊調理法の普及は，摺鉢の量産と食漆器の普及に拍車をかけた。朱（赤色）漆器は古代では身分を表示したものであったが，中世では元や明の堆朱をはじめとする唐物漆器への強い憧れに変わる。16 世紀代はそれが都市の商工業者のみならず農村にまで広く普及して行く。都市の台頭や農村の自立を示す大きな画期であり，近世への躍動を感じさせる「色彩感覚の大転換」が漆器の上塗色と絵巻物からも読み解くことができる。古代後期から中世への転換期，及び中世内の画期において，食漆器製作にも大きな変化が見られ，それは社会的変化に連動することを紹介した。

【キーワード】食漆器，渋下地，朱（赤色）漆器，樹種，荒型，漆採取法

はじめに

本稿では律令的漆器生産（国家，国・郡衙，有力寺社等による，上質品の本堅地・漆下地漆器の独占的生産）から，中世的漆器生産（分業化の進展と各地で始まる漆器生産－普及型の渋下地漆器の開始，多様な樹種選択，流通の拡大）へ転換する過程を，主に食漆器（椀皿類）製作技術などをとりあげながら概観することにしたい。

❶……各地で始まる漆器生産

古代の漆液（以下漆とする。樹木はウルシと表記）の生産（植栽）地は，『延喜式』によると，中男作物（17～20歳以下の男子に地方の特産物を貢進）の漆として，上総・上野・越前・能登・越中・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・備中・備後・筑前・筑後・豊後。交易雑物（諸国が正税で産物を購入して中央に貢進した品）の漆は，越前・加賀・越中・越後国。『正倉院文書』では陸奥国・上野国の漆があげられている。ほかに製品としては，「漆塗韓櫃（からびつ）」（庸）は伊勢・尾張・三河・遠江・近江・美濃・越前・越中・丹波・但馬・播磨国。大宰府からは年料（毎年一定量の品を中央に貢進）として「朱漆酒海・下食盤・中盤・飯椀・羹椀・盤・盞・黒漆提壷」など各種製品を貢進している。漆の生産地および漆器生産は，中世においてもこれらの地域およびその周辺であることは変わりないが，生産体制は大きく転換している。

平安時代後期以降は中央集権的な国家権力は衰え，地方でも国衙や郡単位に確保されていた塗師や轆轤師（木地師）などの工人も自立の道を求めて，各地で新たな漆器生産が開始される。『宇津保物語』（平安時代中期の長編物語[1]）にはその先駆けの様子が見て取れる。「吹上上」に登場する紀伊国牟婁郡の長者神南備種松の作物所の記述がそれである。そこには「細工三十人ばかりヰて，沈，蘇芳，紫檀ドモして，破子，折敷，机どもなど，色々に作る。轆轤師どもヰて，御器ども同じ物して挽く。机たてて物食ふ。盤据ヱて，酒飲みなどす。」以下，鋳物師・鍛冶屋・織物・染殿・擣物・張物・縫物・糸の所の詳細な記述が続く。無論，神南備種松は架空の人物であり，作物所の大規模な内容は官営工房そのものであろうが，近年の発掘調査からは，複合した家内的手工業の在地生産体制を一部反映したものと考えることができる。

たとえば岩手県柳之御所遺跡や志羅山遺跡（12世紀中～後半）からは，在地産の食漆器とともに漆刷毛・漆箆・漆パレット・漆濾し布・荒型（轆轤挽きする前の椀皿木地の手斧成形品）・漆塗り土師器などが出土し，他の鉄・銅・織物などの工人の集住と分業化が確認できる[2]。新潟県寺前遺跡（12世紀後半～13世紀）では製鉄溶解炉壁や鋳型の出土と椀皿の荒型，製品，漆刷毛，漆パレット（後述）などが出土し，荘官級在地富豪層の屋敷内における，鋳物師と木地・塗師の存在が裏付けられる[3]。荘園絵図で知られる越後奥山荘の中核部分をなす新潟県下町・坊城C遺跡（11～13世紀）では，大量の食漆器と荒型，漆工用具が見つかり，荘園内における一貫生産がうかがわれる[4]。石川県オカ遺跡（12世紀前～中葉）は，丘陵末端部を成形して掘立柱建物を造成する空間を作り出し，周囲を石垣と堀で囲み前面に道路が走る屋敷地を造成しているが，敷地内の作業穴から椀の荒型が

出土した。このことは木地師（轆轤師）の存在を示すものであり，能登の熊木院に係わる荘官級在地富豪層の生産体制を考える上で重要である[5]。やがて木地師や塗師など分業化した生産が主流となる。

❷……渋下地漆器の登場と展開

平安中期以降は律令国家の租税収取の基本である個別人身支配から，土地課税制に転換しており，その請負にあたる富豪層（富裕百姓の田堵）が台頭し，食漆器への需要も拡大していった。こうしたなかで，11 ～ 12 世紀にかけて材料や工程を大幅に省略し，下地に漆の代用として柿渋と炭粉を混ぜ，漆塗りも 1・2 層程度の簡素な「渋下地漆器」（渋下地の食漆器の略，普及型漆器ともいう）が出現する。キーワードとなる柿渋は，豆柿・青柿などの果実を破砕し加水ないしは搾汁してえられた液体で，その主成分は加水分解されない縮合型タンニンである。防水や防腐効果があり，食漆器の下地として炭粉粒子と混ぜると，わりと強固な塗膜が形成され，高価な漆に代わるものとして着目された。『倭名類聚抄』（和名抄，931 ～ 938 年）には「賀岐（かき）」が記載されており，柿渋導入はさらに古くなる可能性がある。

食漆器の渋下地導入に加えて，蒔絵意匠を簡略化した漆絵（うるしえ）（赤色漆などで文様が描かれたもの）が施されるようになり（12 世紀中葉～末），これまでの食漆器にはない付加価値が生まれ，需要は急速に拡大していった。やがて椀皿木地の樹種も安価な渋下地に対応して，ブナやトチノキなど多様な樹種が選択されるようになっていく。食漆器は多様な階層に対応した品質の生産が特色でもあるが，上質品（地の粉及び炭粉漆下地）の製作技法は古代と変わらないことは，遺跡出土漆器の科学分析から明らかである。

渋下地漆器の普及は土器埦の激減まねき，漆椀をベースに陶磁器や瓦器埦などの相互補完による新しい食膳様式が形成されるようになった。土器・陶磁器が主体であった西日本でも，広島県草戸千軒町遺跡の調査からも 13 世紀代には日常食器としての食漆器使用が確認されている[6]。ここでは科学分析と漆工具の調査から，渋下地漆器は在地生産，漆下地の上質漆器は商品としての流通品，型押（スタンプ）漆絵漆器は鎌倉からの搬入品と考えられる。漆器生産のメッカであった京都は，その周辺部が食漆器の代用品との説もある瓦器椀が大量に流通していたにもかかわらず，ほとんど受け入れていない。食漆器の普及が推測されよう。

禅宗の影響による汁物・雑炊調理法の普及は，摺鉢の量産と食漆器の普及に拍車をかけた。こうした状況は外国人も目の当たりにしており，朝鮮王成宗の命により申淑舟が作成した『海東諸国紀』（1471 年，海東諸国は日本本国・九州・壱岐・対馬・琉球国の総称）には「国俗　飯食に漆器を用う」とある[7]。三条西実枝（1511 ～ 1579 年）の『三内口決』，「器事」にも「木具。土器。面向之参会。会席。祝儀ハ必用之候」（人々が参会する時や祝儀に用いるもの），「塗物ノ器。 平生受用之器勿論候。皆朱之上或有紋或無紋。漆箔等随所好各用之候。堅固内々之儀候」（平生や内々の宴で用いるもの），青磁。或白茶碗。大臣朝夕之器也。一切塗物不用之。（中略）大臣規模此分ニ候」（大臣がふだん使うもの。塗物は一切用いない[8]）とあり，普段使いの食器が漆器であることを示している。ヨーロッパ人による最初の日本報告であるジョルジエ・アルヴァレスの『日本情報』（1547 年）では，各人

が内面赤色の漆椀を用いていると記し[9]，ロドリーゲスの『日本教会史』（1620年～）にいたっては，すべての食器や装飾具などは漆塗りであり，その技術は全土に広がっていると報告している[10]。漆の国の様子が見て取れるようである。

❸……加飾法の変化―蒔絵・螺鈿

いまひとつ時代の転換期における加飾法の変化について，王道ともいうべき蒔絵技法からみてみよう。蒔絵には研出蒔絵，平蒔絵，高蒔絵の別があるが，平安時代のそれは，絵漆で描かれた文様の上に，鑢で摺り下ろした金銀粉を蒔き，固化した後に木炭で研ぎ，さらに磨き出したものである（研出蒔絵）。金銀粉で蒔き分けることは奈良時代からあるが，花蝶蒔絵挟軾（大阪・藤田美術館，9世紀）や海賦蒔絵袈裟箱（京都・教王護国寺，10世紀）では，錫粉の使用が認められる。11世紀末～12世紀には，金粉に銀粉を混ぜた「青金（あおきん）」が用いられるようになり，細やかな変化を使い分けることができるようになった。さらに蒔きつける部分に密度を変える「蒔暈（まきぼか）し」の技法も生まれ，遠近感の表現も可能となった。また，11世紀は蒔絵技法で描割（かきわり）（葉脈や花の輪郭を残して漆塗りし，その後に金粉を蒔く）や引掻（ひっかき）（金粉を蒔いた後，固化しないうちに針などで掻き取る）が出現し，多様な表現が可能となった[11]。

11～12世紀には蒔絵と螺鈿を併用した例（「片輪車蒔絵螺鈿手箱」東京国立博物館蔵）もみられるようになり，表現の幅が格段に広がった。螺鈿は夜光貝などの貝殻の真珠層を薄く板状に切り出し，漆面にはめ込んだもので，七色の光彩を放つといわれる。こうした日本の螺鈿蒔絵が中国に輸出され高い評価を受けていたことは，北宋の方勺が『泊宅編』（11世紀後半か）で，螺鈿はもともと日本産で，さまざまな器形があり，すこぶる上手な技法で製作されている。中国市場にでまわっているものとは格段の差がある，とのべている。螺鈿は中国から奈良時代にわが国に伝来したものであるが，螺鈿は日本産といわしめるほど，当時の技術は卓越したものがあり，平安後期から鎌倉時代には，蒔絵とのコラボレーションによる日本独自の意匠として，一世を風靡するようになっている。

『山塊記』によると安元元年（1175）には，「塗師，平文師，蒔絵師」，寿永3年（1184）には「螺鈿工」の分化みられるなど，自立化が進行している[12]。このように院政期を境としてさまざまな階層が動き始めたことがわかる。

❹……赤色漆器の普及と社会の動向

赤色漆塗漆器（赤色漆器と略）は，平安時代では朱漆器とよばれ，階級のシンボルとされた。藤原氏（氏長者）の「朱器台盤」がよく知られているが，これは交替儀式（「朱器渡り」の儀）や正月の大臣大饗（宴会）において使用する伝家の重宝である。朱器は朱漆塗りの食器・酒器類で，台盤は長さ8尺，4尺のテーブルで，『類聚雑要抄』，『年中行事絵巻』などを見ると，いくつも並べて使用されており，大変豪華なデーブルコーディネートの様子がうかがえる。宴会に出される食品目は，五位以上は31種もあり，漆器には挽物本来の形の飯椀・羹椀・盤・窪坏と金属器，三彩陶器，

須恵器を写したものがあった。

貴族の食卓は器の種類と量が身分を反映したが，『延喜式』によると，宴会などに用いる食器・酒器は天皇・中宮などは銀器，親王から三位（四位参議含む）までは朱漆器，四位・五位は黒色漆器・土器（緑釉陶器），六位以下は土器（須恵器・土師器）といったように，身分を表示したものとなっている。しかし古尾谷知浩氏は衣服のように罰則をともなうような規制はないので，過度に階層性を強調するのは如何なものかとしている。(13)

こうした色と器の種類による漆器の身分表示はいつごろ生まれたのであろうか。朱漆器は9世紀前半のものが平城京跡から若干量出土しているが，やや増加しはじめるのは9世紀後半以降であること，貞観13年（871）の山城国『安祥寺伽藍縁起資材帳』に「朱漆器三百八十六口」，元慶7年（883）の河内国『観心寺勘録縁起資材帳』に「朱漆器百廿五枚」（大椀・羹椀・小盤・中盤など）と大量使用の記載があること，朱器台盤が藤原氏の氏長者の重宝となった時期は，10世紀終わり，藤原兼家（929～990年）の頃(14)といわれていることなどを勘案して，漆器の身分表示が定着したのは，9世紀後半から『延喜式』完成の延長五年（927）までの間と考えておきたい。

鎌倉時代になると漆巻物や出土漆器に内面赤色外面黒色（内面赤色と略）の椀皿類が在地領主，寺院，上級武士の館跡などで確認できるようになる。『暮帰絵詞』（1351年，西本願寺蔵）では，覚如屋敷の厨房の厨子棚には食漆器がずらりと並んでいるが，内面朱漆塗りの折敷や椀皿，松茸が山盛りの大きな皆朱（総朱塗り）盤が描かれている。総赤色（皆朱）食漆器の出土量が増加しはじめるのは15世紀代からで，武士クラスではかなりを占めるようになったことが，寛正4年（1463）の「新見地頭方政所見捜物色々在中」（東寺百合文書サ函123）からもうかがえる。(15)新見荘地頭方政所で使用された漆製品は，瓶子・銚子・提子・鏡箱・蒔絵の茶入れ・薬壷・湯盞台・茶盆・香箱・折敷・椀・皿などで，在地支配者層が使用した当時の製品全体がほぼ網羅されている。内面赤色椀も含めると大半が朱漆器である。16世紀になるとこの傾向は加速し，越前・常神半島の刀禰大音氏の雑物注文（16世紀中頃）(16)のうち，漆器は皆朱と内朱で占められていた。

こうした朱やベンガラ漆による赤色漆器流行の背景には，元や明の堆朱をはじめとする唐物漆器への強い憧れがある。『君台観左右帳記』や『室町殿行幸御餝記』によれば室礼における唐物の多さは圧倒的であり，漆器では朱を多用した堆朱，堆黒などの彫漆が主流を占めている。朱への強い憧れが禅家・公家・武家の座敷飾りや調度品のみならず，食漆器にも及んだことは当然であろう。

16世紀代は赤色食漆器が都市のほか農村にまで広く普及して行く，大きな画期である。福島県河股城跡では内面赤色の漆器は73％，総赤色（内外面赤色）漆器は8％，両者で81％という高い比率である。富山県梅原胡摩堂遺跡では総赤色4.8％，内面赤色19％，両者あわせて23.8％。石川県七尾城跡シッケ地区遺跡では内面赤色を含めて赤色漆器は35％であり，近世の金沢城跡沈床園調査区では総赤色50％，内面赤色12.5％，両者あわせて62.5％，同じく白鳥堀調査区では総赤色17.6％，内面赤色29.5％，外赤色11.8％，三者あわせて58.9％である。石川県八間道遺跡（大聖寺藩筆頭家老佐分家屋敷跡）では総赤色18.8％，内面赤色50％，両者あわせて68.8％，新潟県新発田城跡では総赤色12.5％，内面赤色50％，両者あわせて62.5％であった。(17)なお，赤色漆器といっても2種類がある。赤色顔料に高価な朱を用いて，漆下地に何回もの漆を塗り重ねる朱漆器あるいは皆朱漆器とよばれる高級漆器と，安価なベンガラ漆に渋下地の普及型漆器である。家財から所有

階層を特定する場合はこうした比較も重要となる。

このように16世紀に入ると食漆器の上塗色は黒色から赤色への傾斜をいっそう強め，社会的には都市の商工業者の台頭や農村の自立があり，近世への躍動を感じさせる「色彩感覚の大転換」が漆器の上塗色と絵巻物からも読み解くことができる。戦国大名は高級な嗜好品は主に畿内より調達しているが，手工業製品の領国内自給生産をめざし，また商工業者への営業税的諸役を課すなどの経済政策を行っている。近世では大名の領国政策によって，各地に漆器産地が形成された。『和漢三才図絵』や『毛吹草』によってその大勢を知ることができるが，能登の合鹿椀のように木地師が製作した狭域供給の渋下地漆器は，そうとう存在したと思われる。(18)

❺……食膳の構成

『病草子』(12世紀中・後半，写真1)は，中世前期の庶民の食膳がうかがえる貴重な絵画史料である。歯槽膿漏で泣いている萎烏帽子に水干葛袴の男の前には，白木の折敷に総黒色の漆椀2個とおまわりとよばれる漆皿4枚が置かれている。一汁三菜のセットである。飯椀は高盛の垸飯に長い箸が突き立てられている（中国・朝鮮半島の作法）。口径が狭くやや深めの椀は羹（あつもの）椀（汁椀）。小皿の一枚は酢や塩の調味料入れ，ほかは魚や野菜の采皿である。これらの食漆器には内外面に赤色漆絵の加飾があることに留意したい。平安後期にはこうした絵画的世界と渋下地の導入によって，安価でありながらこれまでにはない華やかなものが登場し，食漆器の普及に拍車をかけていくことになる。

なお，台盤のようなテーブルがない庶民の食卓（折敷）では，長い箸は理に適っている。汁椀は手に持っても熱くなく，保温力に優れ，口当たりが柔らかい。かつ軽量であることから，汁物・雑炊椀を手に持つ習慣が生まれたのだろう。12世紀後半以降，各地の窯ではすり鉢（こね鉢）の生産が活発化し，禅宗の影響もあって雑炊や汁物が普及する。中世は飯椀・汁椀を手に持ち箸で食べる日本的な食習慣の確立期といってよいだろう。換言すれば，狸汁・松茸汁などあらゆる食材の汁物が生まれた中世は，汁物文化の時代でもあった。

椀は当初，飯・羹（汁）椀の2つであったが，14世紀前後には大中小の三つ組椀（入れ子）も，少ない

写真1　病草子（京都国立博物館蔵）

写真2　鼠草子（天理大学天理図書館蔵）

ながら見られるようになる。鼠の権頭（ごんのかみ）が人間の姫君と結婚する異類婚姻譚の『鼠草子』（16 世紀前半，天理大学天理図書館蔵，写真 2），祝言の厨房場面では，祝い事のため膳は三方で，内面赤色の椀皿による一汁三菜。三の椀は飯の蓋である。同様の組椀は『七一番職人歌合』（16 世紀前半，東京国立博物館蔵）の「ひきれうり」（挽入売）でも見ることができる。16 世紀前半の出土漆器の量から見ると，中国製磁器（青磁・白磁）の輸入増大や日本産陶器（瀬戸・美濃）の生産の盛行から，皿にかわって盃が増加している。本膳料理のセット解説は省略する。

❻……漆の採取法と量

古代の漆生産地は，「中男作物」の貢進国によって知ることができることは先に述べたが，漆の量は「大宝令」の調副物では 3 勺（正丁）だったものが，5 倍の 1 合 5 勺（『延喜式』）にはねあがっている。古代の度量衡では穀物は大升，これ以外は少升を使用しており，大升 1 升は小升 3 升にあたる。澤田吾一氏は大升 1 升を m 法以前の 4.06 合に相当するとしたが，小升漆 1 合 5 勺は今でいえば 36.5ml ほどになろうか。採取痕のあるウルシが出土した，埼玉県反町遺跡（6 世紀末～ 7 世紀中葉）や埼玉県西吉見条里遺跡（7 世紀後半～ 8 世紀前半）のウルシには，細い線刻（掻き取り痕）が 10 ～ 13cm 間隔で認められる。これはまさに「尾張国郡司百姓等解」（『尾張国解文』988 年）にいう，「一樹出汁僅勺撮」（1 本から出る漆の量はわずかに勺（しゃく）か撮（さい）程度）を示すものと思われる。仮に 1 勺を約 2.4 ml とした場合，中男の税はウルシ 15 本ほどからの採取量と推測される。現在の技術（殺掻き法）をもってしても 10 ～ 15 年生のウルシ 1 本からの採取量は，年間わずか 100 ～ 150ml ほどだから，古代の税はかなり厳しいものといわざるをえない。なお，石川県指江 B 遺跡の E 区河道（8 ～ 10 世紀）から，掻き取り痕があるウルシ（長さ 28cm，幅 2.7㎝）の枝が出土した。全体に幅 2 ～ 3㎜の U 字状の掻き取り溝が 25 本確認されている[19]。溝の太さは今日と変わりないもので，反町遺跡や西吉見条里遺跡例とは異なっている。河道の杭に転用されていることから，古代として報告されているが，U 字形の深い溝からみて時代の再検討も必要であろう。

中世の採取法と量については，渡邊太祐氏が備中国新見荘を取り上げて検証している。文永 8 年（1271）とされる「新見荘西方漆名寄帳」では，3589 本が検注され 1 本あたり「一夕一才五リ」とある（実際には「一勺二才五リ」の漆が課税）。元弘 3 年（1333）の「新見荘東方年貢納帳」では，納入者とその量がわかる貴重な史料であるが，例えば 7 月 22 日では 4 勺五才から 3 合まで，都合 13 名で 1 升 4 合 3 勺 3 才が納入されている。この植栽本数と納入量はかなりのものであり，漆利用の増大がうかがわれる。渡邊氏によると中世新見荘においては，畠地や屋敷地の周囲にウルシが植栽された景観が考えられるという[20]。これは近年までの景観と変わりないが，漆山がいつから始まるのか気になるところではある。また，阿波国麻植山内三木村の番頭百姓の訴状から，漆掻き専業集団の存在を推測されている。

具体的な漆掻き法についてはまったく史料がないので，近世の『日本山海名物図絵』（平瀬徹斎，1754 年，図 1）の図と記述から考えてみることにしたい。『日本山海名物図絵』では「漆の木に鎌にて切目をつくれば，その切目より汁ふき出るを竹べらにて，こそげ取也[21]。」とある。ウルシに鎌で樹皮を剡ぎ，その刃先で漆液溝を引っ掻くということになろうか。図 1 からは，掻き取り痕は今日のように一周するのではなく，階段状に間隔をおいて採取する養生掻き（「養生掐」佐藤信淵『草

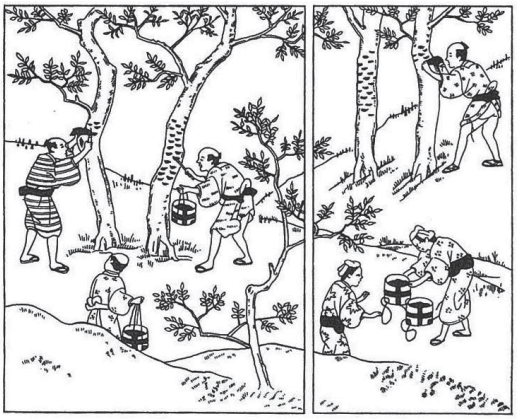


図1　平瀬徹斎『日本山海名物図絵』
（1754年，名著刊行会1979年）

写真3　広島県草戸千軒町遺跡の大型漆容器
（撮影 四柳嘉章）

木六部耕種法』1832年）であることがわかるが，はたしてこのような方法があったのかはわからない。

竹製の掻箆は南部藩の記録では，1865年（元治2）に鉄製になっている。この掻箆が中世でも竹や木製であったと思われるが，鉄製の導入時期は今後の課題としておきたい。考古資料で漆の大量使用がうかがえるのは，広島県草戸千軒町遺跡出土の曲物製漆容器である。1つはバケツ型大型曲物（29次調査SK2009出土，13世紀後半～14世紀初頭，報告書にサイズ未記載，写真3）で，内外面に漆がびっしりと付着した漆桶。出土品としては最大のものである。今一つは口径20cm・器高15cmで，相当な量の漆が入る（31次調査SG2741出土，13世紀後半～14世紀初頭，図2―1）[22]。これは工房に置かれ，この桶からさらに漆パレットに小分けされる。5次調査SE118出土の大型曲物（器高約36cm，口径約27cm，14世紀中葉，図2―2）も工房に置かれた漆容器で，蓋紙が折り曲げた状態で付着している[23]。同様の破片は複数あり，漆パレットにいたっては数えきれないほどである。こうしたことからも，中世の漆及び漆器生産量は古代とは比較にならないことは容易に想像がつく。

❼……漆器生産と荒型，木地，漆工具

食漆器の在地生産を裏付けるものは，椀皿類の荒型と木地製品，漆製品，漆工具類の出土である。それぞれが単独に分業化した生産方式と，古代的な幾種類かの工房群が連動した操業もある。後者から荒型の製作技法をみてみよう。

（1）新潟県寺前遺跡

新潟県出雲崎町寺前遺跡（12世紀後半～13世紀）は丘陵裾部の谷筋に立地し，斜面を切り崩して平坦部を形成している。当遺跡の大きな特徴は製鉄溶解炉壁や鋳型の出土と漆椀の荒型，製品，漆刷毛，漆パレット（後述）などの出土である[24]。荘官級在地富豪層の屋敷内における，鋳物師と木地・塗師の存在が裏付けられ，あたかも平安時代中期の最古の長編物語『宇津保物語[25]』「吹上上」に登場する，紀伊国牟婁郡の長者神南備種松の作物所を彷彿とさせる（「❶各地で始まる漆器生産」参照）。

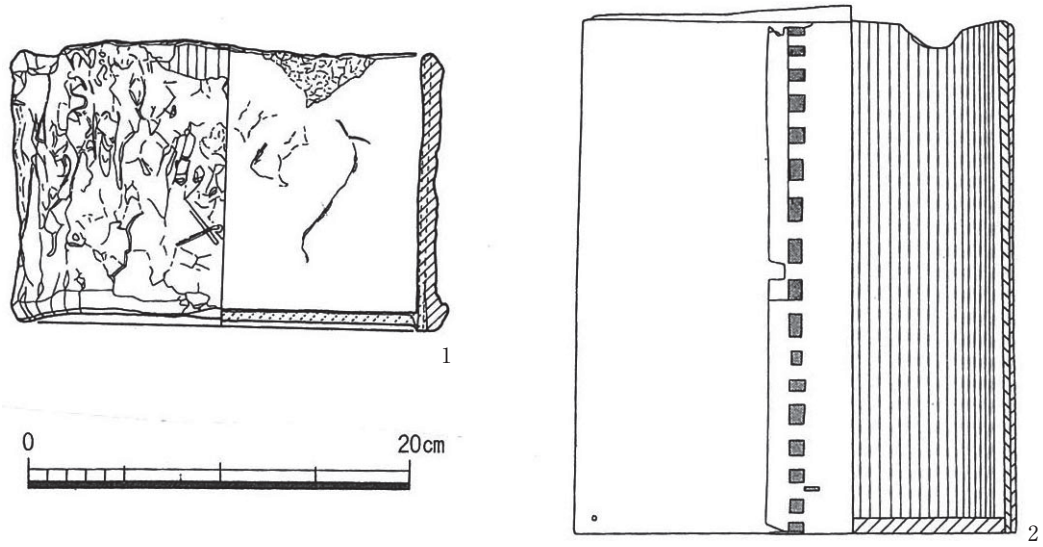


図2　広島県草戸千軒町遺跡の漆容器（1 註 22 文献，2 註 23 文献）

いくつかの異なる工房群の連動した操業は，近年の発掘所見から在地領主の家内的手工業の実態を反映しているようである。

寺前遺跡では注視したいのは，鋳物師が塗師及び木地師を兼ねていたとする見解である。輪島では椀木地師（近世以降は木地屋という）は「火作り」とよぶ鍛冶作業を行う。それはロクロ挽き用の中刳り鉋・荒鉋・外目取り鉋・内目取り鉋・糸輪用鉋を自作するために，鋼鉄棒を熱してハンマーで内締め，成形し焼入れ後冷却して刃を砥石で研いで仕上げる。これは近世以降と考えているが，木地師が自分に適した鉋に仕上げることは通常のこと。しかし鋳物師や製鉄関連工人は材料や素材を供給することはできるが，鉋を仕上げて木地成形まで仕上げることは熟練を要することであり，木地師を兼ねることはそう簡単ではない。薄手の上質品に使用される木地挽きは主として専業の木地師であろうし，厚手の渋下地漆器に使用される木地挽きは，季節的な半専業であっても可能である。

漆器は木製品のうち 163 点（4%）の出土をみているが，特徴的なことは椀皿の荒型および挽物で 30 点を占めていることで，椀皿の荒型の樹種はケヤキが多く，柾目の横木取りである。成形法は椀や皿の外面が鉋（木地鉈）ないし柄に直行する直刃の手斧（チョンナ，チョンノ），内面は直刃の手斧で刳りぬかれている（図3）。現在のようなU字状中刳りチョンノは中世では出現していない。したがってロクロ挽きしやすいように細かくはつられている。中世では荒型作りも木地師が行っていたと思われる。手曳き横軸ロ

写真4　現代輪島塗木地の荒型（左外面・右内面，撮影 四柳嘉章）

クロに着装された鉄爪の痕跡，いわゆるロクロ爪痕は，大半が金子裕之分類の4爪＋中央1爪である[26]が，細部を見ると正菱形と平行形に分類できる。また中央爪が2例だけ二重円痕のものがある（金子の中央孔とは異なる）。中世では後者の形は各地で確認できるので，これをどう見るかは課題としておきたい。

漆刷毛は幅3.3cm，厚さ1.2㎝，長さ16cm，樹種スギ（柾目）。獣毛を挟み込んだ下端にケビキが施されている。刷毛の形態はさまざまなものがあるが，古代では概して刷毛先から柄元の頭部は柄よりも太く，柄は細く削り出されたものが多い。近世に入ると今日と同じ板状となるが，寺前遺跡例はその前段階の形状であり，まさに中世的形態といえる。

なお，寺前遺跡出土漆器そのものの品質については，報告書ではふれられていないが，1994年の北陸中世土器研究会研究大会（於：一乗谷朝倉氏遺跡）のおりに，サンプル採取を許可された2点の分析結果が手元にあるので，分析結果を紹介したい（写真5）。

写真5–1は総黒色系椀で塗装工程は木地の上から塗装順に，①炭粉漆下地層（196 μm以上）②漆層（24～60 μm）。炭粉粒子の沈殿により分離。③漆層（20 μm前後）④漆層（29 μm前後）⑤漆層（20 μm前後）。写真5–2は漆パレットに転用された総黒色系皿。本体は①炭粉漆下地層（100 μm以上）②漆層（20 μm前後）で，漆下地漆器としては塗り重ねが少なく，破損した後にパレットに転用されている。パレットの漆層は層厚372 μm前後で，きれいにかきとられている。このパレットはこれまで紹介されていないので，漆工具の追加ということになる。

（2）新潟県下町・坊城（ぼうじょう）遺跡C地点

新潟県胎内市（旧中条町）政所条遺跡群は，奥山荘の中心遺跡である江上館とその周辺の下町・坊城遺跡の総称で，鎌倉時代の景観は「奥山荘波月条近傍絵図」（国指定重要文化財）によってうかがうことができる。江上館の西南約400mに位置するC地点はL字形に流れる川の両岸及び南方を区切る川の北側に営まれており，掘立住建物107棟・井戸22基等が検出されている（12世紀後半～14世紀代）。13世紀以前の資料が4／5を占めており，江上館跡以前の奥山荘の中核と考えられている[27]。大量の漆器と椀・皿・蓋（合子）などの挽物木地製品及びその荒型，漆液容器，漆パレットなどの出土からみて，当該遺跡内で漆器までを一貫生産していたと考えられ，A地点からの継続性が考えられる。木地のロクロ挽き未成品には椀皿蓋があるが，椀の荒型は外面は鉈ないし直刃のチョンナ，内面は直刃のチョンナで細かく調整していることは，寺前遺跡と同じである。椀皿未成品のロクロ爪痕は，正菱形，平行形，その他がある。木地製品には薄手の良品もあるが，多くは厚手でラフな作りのものであり，簡単な塗り（炭粉漆下地）のものが多い。上質漆器は漆絵の筆法などからみて流通品の可能性が高い。

なお東北北部（青森県）では木地生産の画期は11世紀である[28]。それまでの椀は身と高台を別々に作って接合していたが，11世紀に回転轆轤が導入され，量産化が開始される。これにより食膳具が木器・漆器に代わり，そこに渋下地が導入されていく。

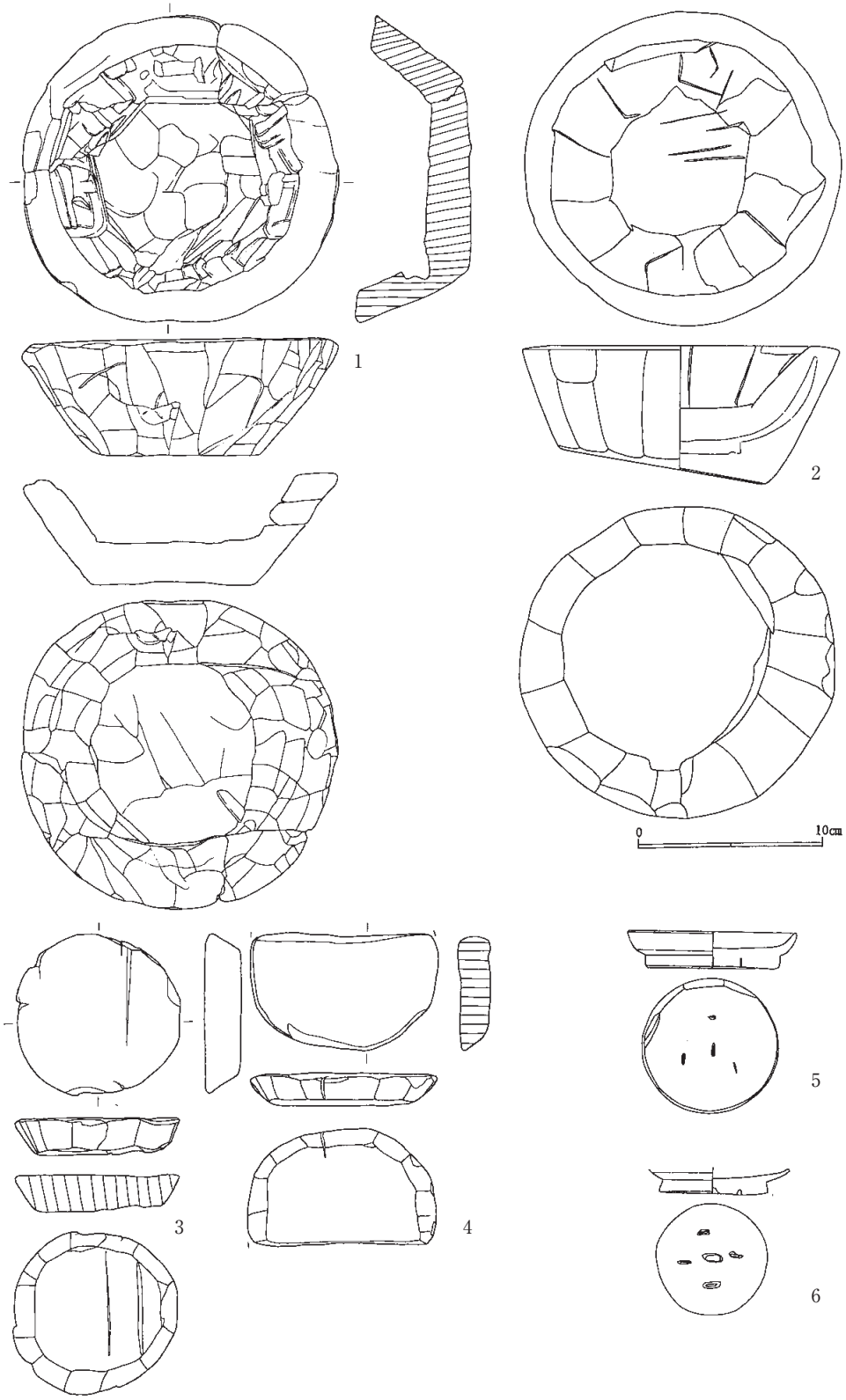


図 3　新潟県寺前遺跡出土の荒型（1～4）と木地（5・6）（註 24 文献）

❽……漆器と樹種の選択

食漆器の樹種は北陸ではケヤキ主体から，15世紀以降は安価な渋下地漆器に対応した，ブナやトチノキをはじめ多様なものが選択されている。七尾城関連遺跡から紹介する。

(1) 七尾城跡シッケ地区遺跡

石川県七尾市南部の石動山系に築かれた七尾城は，能登畠山氏の居城であり典型的な中世山城である。能登畠山氏は室町幕府の管領畠山基国の弟満慶が，畠山四分国をさいて応永15（1408）年に能登一国を領有したことに始まる。以後拡張・整備がおこなわれ，七代総義のときには城下町も繁栄し最盛期をむかえたといわれている。しかし天正5（1576）年9月15日，越後の上杉謙信軍の侵攻により，難攻不落の七尾城もついに落城した。その後天正9（1581）年に前田利家が入城するが，まもなく現在の七尾港にほど近い所口の小丸山城に移り，七尾城は廃城となった。

平成3（1991）年に七尾城下町の一角と推測される古屋敷シッケ地区の発掘調査が行われ，16世紀代の短冊形区画の町屋遺構や漆工・鋳造遺物が出土，職人の居住区域が姿を現した。それまでは七尾城下町遺跡の調査は行われておらず，これを契機として畠山時代の実像が次第に明らかにされるようになった。シッケ地区からは，青磁・白磁・国産陶器の上質品が少ないにもかかわらず，漆器では高級品の漆下地が16%を占め，家財としてはアンバランスな傾向がみられた。この矛盾は，ゴミ穴的な池状遺構（9号土坑）から食漆器が集中出土していること，漆パレットが含まれていること，高級品から普及品まで各種がそろっていることを考えると，漆篦や刷毛類こそ出土していないが，漆工房の存在が浮かび上がってくる[29]。また9号土坑からは小炉壁やトリベなどの鋳造遺物も出土しており，一帯は塗師，鋳物師など職人の町屋区域と考えられる。

漆器分類と樹種

シッケ地区遺跡での食漆器調査の特色を紹介しておきたい。ここでは食漆器のうち時期が明確（16世紀代の陶磁器類が主体的に出土しているが，最盛期は16世紀第2四半期）な椀皿鉢49点について塗膜分析を行い，そのデータを基に分類を行った。分類は漆器の品質による特色が抽出できるように，まず下地別に分けた上で，上塗色・器形・加飾などで分類する方法をとった。また他の遺跡出土品と客観的に比較するために，多変量解析による分類も行った。これまでの考古学ではこうした分類を行うことはなかったので，漆器分類の方向性を示した最初の報告といってもいい。

下地別の詳細は省くが，地の粉漆下地18%，炭粉渋下地2%，炭粉渋下地80%，内面赤色を含めた赤色（朱）漆器35%，器種では椀が89.8%で，圧倒的多数を占めている。椀では一の椀と二の椀の組み合わせがみられる（シッケ地区遺跡では以前の集計表に一部誤植があるので本稿が正しい比率）。

シッケ地区の漆器分析報告は約20年前になるが，2014年に高橋　敦氏が樹種を久田正弘氏がそれを踏まえて，筆者の塗膜分析結果との相関関係を検討するとともに，石川県内出土漆器の樹種選択について考察を行なった[30]。図4は高橋氏の樹種同定結果を筆者の下地分析に記入したもの。上質

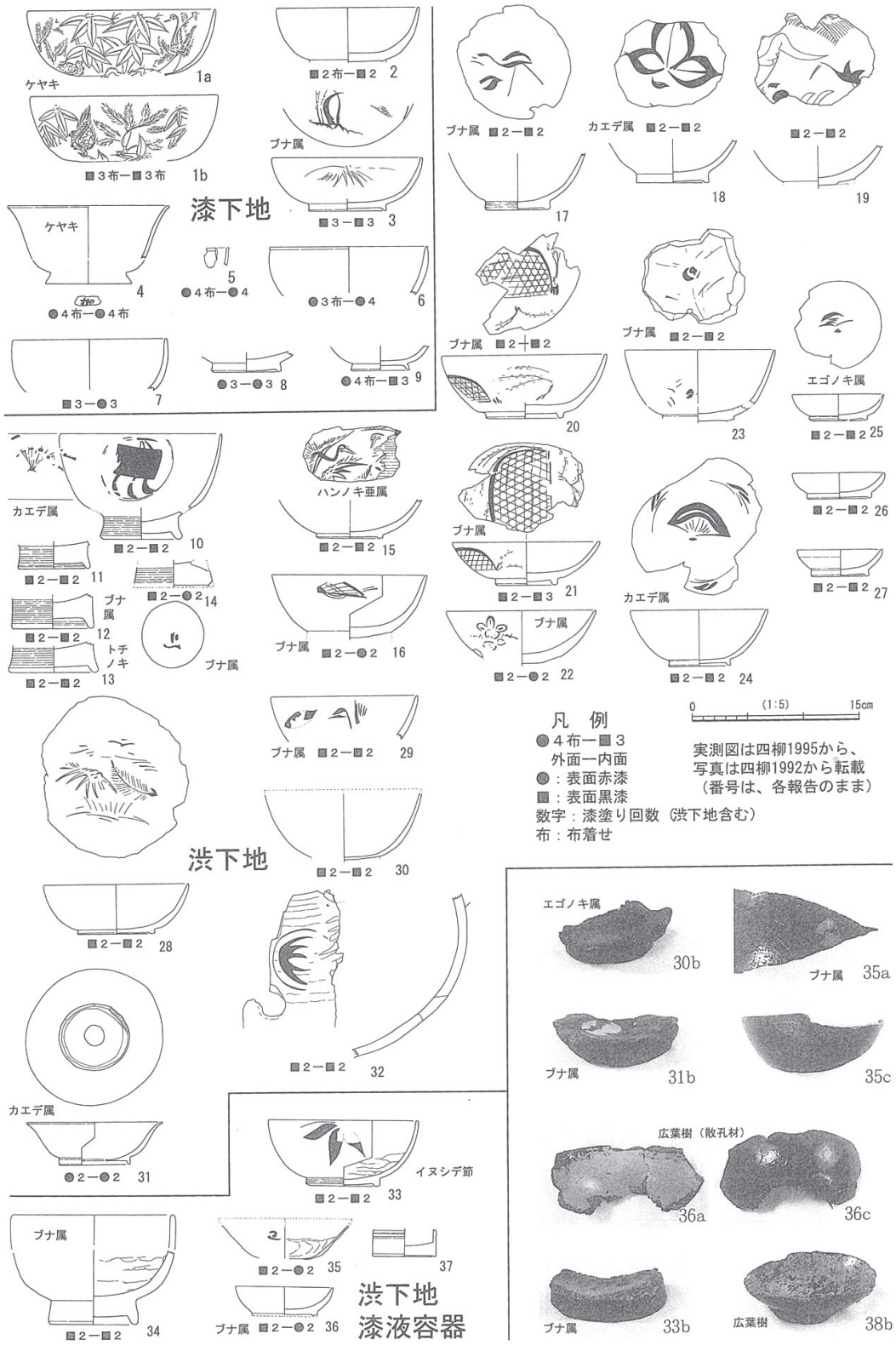


図4　石川県七尾城跡シッケ地区遺跡出土の食漆器と樹種（註29・30文献）

品である地の粉漆下地漆器はケヤキ（一部簡素な工程はブナ属），安価な炭粉渋下地漆器はブナ属が多く，次いでカエデ属，その他ハンノキ属，イヌシデ節，トチノキ属，エゴノキ属となっている。カエデ属が多いことは能登地域のであり，久田氏はこれを好んで使用する製作集団（木地師）の存在を推測している。

かつて筆者は西川島遺跡群の樹種同定を行った松田隆嗣氏の結果を踏まえて，次のような考察をした。「鎌倉前期ではケヤキ45%，ブナ36%。鎌倉後期においてもケヤキは57%であるが，ブナのほかにサクラが14%を占めている。室町時代になると，ブナ・トチ・マツ・ハリギリ・カエデ・ミズキ・ホオノキ・ケヤキなど，多様な樹種の使用が確認された。うちブナが44%，他は6%前後で，圧倒的に安価なブナの使用が認められる。ブナは普及タイプの渋下地漆器に用いられており，両者の相関関係が証明できたことになる。樹種からみれば上質品に用いられたケヤキ資源の枯渇問題が浮上し，一方で上質漆器を使用する階層が減少したことを意味する。また，大鉢の樹種が時代をこえて針葉樹のマツが使用されていたことも興味深い現象。[31]」。今回のシッケ地区での樹種同定結果は，広く同様の傾向にあることを示すものとなる。なお福島県河股城跡ではブナが多数を占め，仙台城三の丸跡でもブナ83%，日本海側の富山県梅原胡摩堂遺跡でもブナ79.5%，トチノキ14.7%，ケヤキ5.8%であった。

(2) 七尾城跡

石川県埋蔵文化財センターでは，2005～2007年度にかけて石川県七尾市七尾城跡の発掘調査を実施している（七尾市古屋敷，同古城，同竹町地内，調査担当者中屋克彦氏）。報告書は近刊予定であるが，筆者の関係した部分と樹種の概要を紹介する。

発掘調査によると一般居住区，鍛冶・鋳物師・染物・金工・かわらけ造りなどの手工業職人の工房が検出されている。[32]椀皿蓋鉢の容器類（16世紀第3四半期）の比率を集計すると，皆朱漆器（地の粉漆下地）13%，皆朱漆器（炭粉渋下地）5%，内朱漆器（炭粉渋下地）13%，総黒色漆器（地の粉漆下地）5%，総黒色系漆器（炭粉漆下地）5%，総黒色系漆器（炭粉渋下地）59%となる。すなわち全体としてはシッケ地区遺跡に近い傾向にある。口縁部の分析ではシッケ地区遺跡と同じく，上質品には布着せがあり，上塗漆と漆絵顔料のすべてに高価な朱の顔料が使用されている。漆塗りの盛り上げ小札の出土は注目される。

樹種ではブナ属50%，カエデ属22%，ケヤキ17%，クリ11%で，地の粉漆下地の上質品はケヤキ，渋下地の普及品はブナ属という相関関係が認められる。砥石や漆刷毛，漆箆は出土していないが，漆パレットが出土しており，何らかの漆工作業が行われていたことになる。

なお，福井県一乗谷朝倉氏遺跡（16世紀）についても塗膜分析報告を行っているが，[33]樹種では渋下地の食漆器（椀）はブナ属が圧倒しており，トチノキがこれに次ぐ。[34]上質漆器はケヤキであることは，いずれの遺跡においても共通している。

終わりに

以上古代から中世への転換期において，食漆器製作に大きな変化が見られ，15・16世紀におい

てもさまざまな変化がおきていたことを覚書的に紹介してきた。一部の地域を取り上げて紹介したが，同様の変化は各地でもおきている。まだ科学的分析を含む漆器考古学的調査が少ないので割愛せざるをえなかった事例も多い。そうした中で広島県草戸千軒町遺跡では，これまで出土した食漆器の悉皆調査を行い『草戸千軒町遺跡出土漆器関係資料 1ー椀皿類の概要ー』[35]が刊行された。目視によるものではあるが，数年かけて行ったもので信頼度は高く，また剣箆，刷毛，砥石などの工具類の検討から，指物を始めとする上質品の生産が行われていたことも判明してきた。近々科学的調査をふまえて総合的な報告を刊行予定であり，本稿で書ききれなかった課題を解き明かしたいと思っている。

註

（1）――河野多麻『宇津保物語』（「日本古典文学大系」第 10 巻）岩波書店，1959

（2）――三浦謙一「柳之御所跡出土の木製品ー速報」『紀要Ⅹ（平成元年度）』岩手県文化振事業団埋蔵文化財センター，1990 ほか

（3）――高橋　保ほか『寺前遺跡　一般国道 116 号出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ』新潟県教育委員会，新潟県埋蔵文化財調査事業団，2008

（4）――四柳嘉章「新潟県中条町下町・坊城Ｃ地点出土漆器の科学分析」『新潟県北蒲原郡中条町下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町教育委員会，2001

水澤幸一『奥山荘城館遺跡』同成社，2006

（5）――四柳嘉章・細口喜則『オカ・ノギヤチ遺跡』石川県中島町教育委員会，1992

（6）――下津間康夫『草戸千軒町遺跡出土漆器関係資料Ⅰー椀皿類の概要ー』（草戸千軒町遺跡調査研究報告 10）広島県立歴史博物館，2011 ほか

（7）――申叔舟著・中村栄孝解説『海東諸国紀』国書刊行会，1975

申叔舟著・田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波書店，1991

（8）――『古事類苑』（器用部一）吉川弘文館，1979

（9）――ジョルジェ･アルヴァレス「日本情報」（1547），岸野　久『西欧人の日本発見ーザビェル来日前ー日本情報の研究』吉川弘文館，1989

(10)――ジョアン・ロドリーゲス著　池上岑夫・佐野康彦ほか薬『日本教会史　下』（「第航海時代叢書」）岩波書店，1967

(11)――荒川浩和『蒔絵』日本の美術 35，至文堂，1969

小松大秀･加藤　寛編『漆芸品の鑑賞基礎知識』至文堂，1997

(12)――櫛木兼周・栄原永遠男「技術と政治ー律令国家と技術ー」『技術の社会史』第 1 巻，有斐閣，1982

(13)――古尾谷知浩『漆紙文書と漆工房』名古屋大学出版会，2014

(14)――岩井隆次「朱器台盤考」『古代文化』484 号，古代学協会，1999

(15)――小泉和子「荘園政所の家財と生活」『朝日百科　日本歴史 2』，1986

(16)――網野善彦「北国の社会と日本海」『日本海と北国文化』小学館，1990

(17)――四柳嘉章『漆Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局，2006

(18)――四柳嘉章『漆の文化史』岩波書店，2009

四柳嘉章「合鹿椀」『漆　悠久の系譜ー縄文から輪島塗，合鹿椀』石川県輪島漆芸美術館，2011

(19)――四柳嘉章・四柳嘉之「指江Ｂ遺跡出土漆器の科学的分析」（『宇ノ気町指江Ｂ遺跡』）石川県教育委員会，2002

(20)――渡邊太祐「荘園制下の漆木栽培と漆掻きー備中国新見荘を事例としてー」『鎌倉遺文研究』第 30 号，吉川弘文館，2012

(21)――平瀬徹斎『日本山海名物図絵』名著刊行会，1979

(22)――『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所，1994

(23)――『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所，1995

(24)――高橋　保ほか『寺前遺跡　一般国道 116 号出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ』新潟県教育委員会，新潟県埋蔵文化財調査事業団，2008

(25)――四柳嘉章「新潟県中条町下町・坊城Ｃ地点出土漆器の科学分析」『新潟県北蒲原郡中条町　下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町教育委員会，2001

(26)――金子裕之「百萬塔・陀羅尼経」『法隆寺の至宝』（第 5 巻）小学館，1991

(27)――河野多麻『宇津保物語』(「日本古典文学大系」第 10 巻）岩波書店，1959
(28)――三浦圭介「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジウム　土器からみた中世社会の成立』中世土器研究会シンポジウム実行委員会，1990
(29)――四柳嘉章「七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析（第 1 次報告)」『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会，1992
四柳嘉章「16 世紀の漆器―能登・七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器第 2 次報告」石川考古学研究会々誌第 38 号，1995
(30)――高橋　敦・久田正弘「中世能登における漆器生産について―七尾城跡シッケ地区の分析を中心に」『石川県輪島漆芸美術館紀要』第 9 号，2014
(31)――四柳嘉章編『西川島―能登における中世村落の発掘調査』石川県穴水町教育委員会，1987
(32)――中屋克彦「七尾城跡（1 次)」「七尾城跡（2 次)」「七尾城跡(3 次)」『石川県埋蔵文化財情報』第 17 号(2006)～ 20 号（2008)，石川県埋蔵文化財センター
四柳嘉章「七尾城跡出土漆器の科学分析」近刊予定
(33)―― 四柳嘉章「一乗谷朝倉氏遺跡出土漆器の塗膜分析」『朝倉氏遺跡資料館紀要』2003
四柳嘉章『漆Ⅱ』法政大学出版局，2006
(34)――鈴木三男・能代修一「越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種」『朝倉氏遺跡資料館紀要』1990，1991
(35)――下津間康夫『草戸千軒町遺跡出土漆器関係資料Ⅰ―椀皿類の概要―』（草戸千軒町遺跡調査研究報告 10）広島県立歴史博物館，2011

全体にわたる引用文献

四柳嘉章　『漆Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局，2006
四柳嘉章　『漆の文化史』岩波書店，2009

（石川県輪島漆芸美術館館長・国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2015 年 5 月 30 日受付，2017 年 7 月 31 日審査終了）

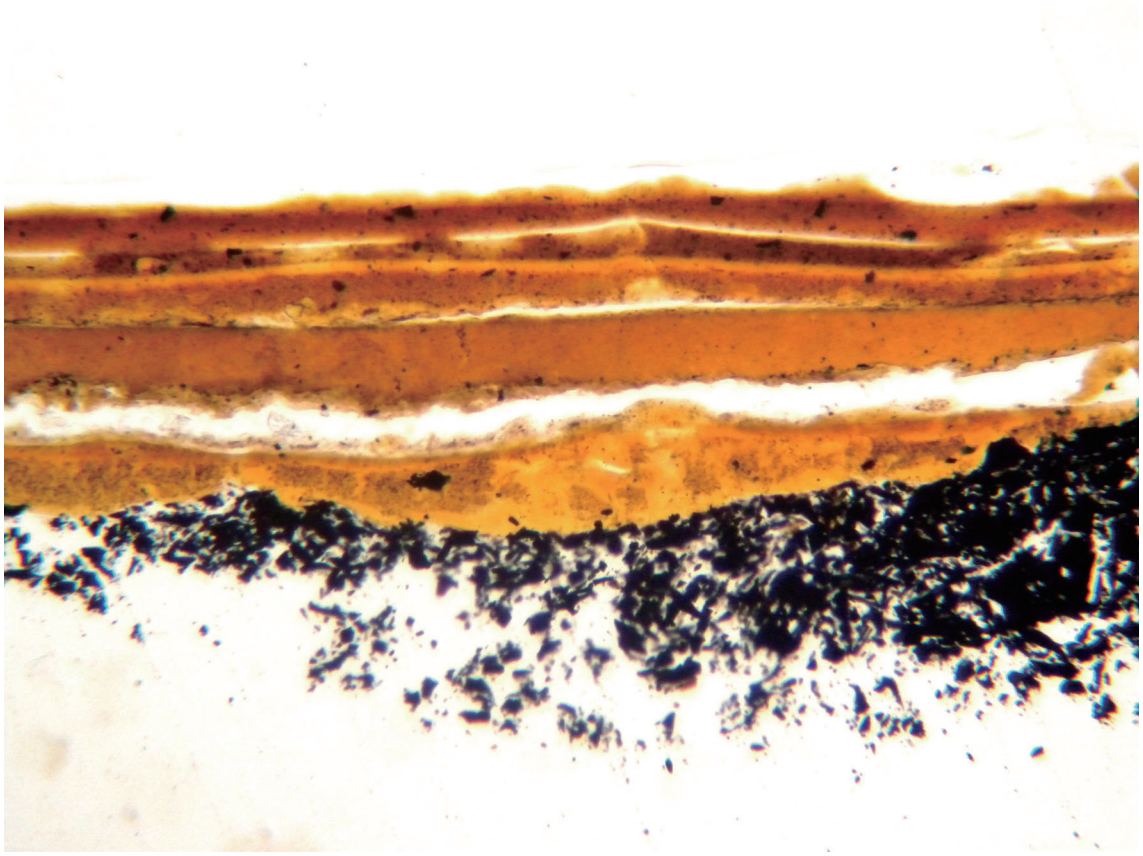
Transition of Lacquering Techniques and Social Dynamics in Medieval Japan

YOTSUYANAGI Kasho

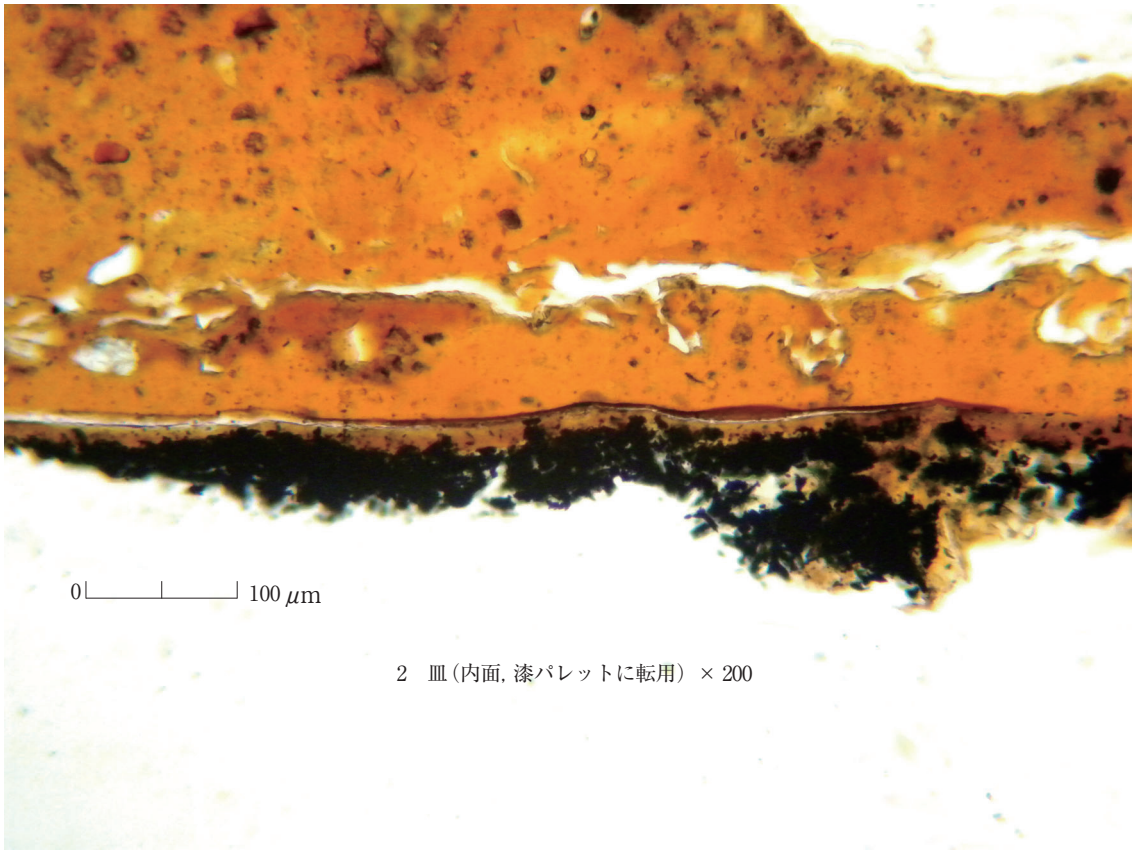
This article examines the transition from late ancient to medieval modes of lacquerware production, with a special focus on the production techniques of lacquered tableware (bowls and plates), by analyzing its social and cultural background. Artisans, such as lacquerers and woodturners, who wanted to be self-reliant, opened new lacquer workshops around Japan in the late Heian period. In fact, some sites, including the Teramae site (dating back to the late 12th to 13th century) in Niigata Prefecture, have yielded archaeological evidence for the existence of casters and woodturners-cum-lacquerers working at the residences of local elites of the bailiff class. The unearthed objects include iron-melting furnace walls, rough-cut bowls and plates before applying lacquer, lacquered bowls and plates, and lacquer paint brushes and palettes. Later, lacquer artisans became more specialized and divided into distinct professions, such as woodturners and lacquerers. Meanwhile, persimmon lacquer (undercoated with a mixture of persimmon tannin and carbon powder and covered with a layer of lacquer) appeared from the 11th to 12th century. It was a simpler process with fewer steps and fewer materials. In addition, the technique of lacquer painting was introduced as a simpler alternative to gold lacquering. These new techniques boosted the demand for lacquerware. In the 15th century, the variety of woods used for cheap persimmon-lacquered tableware increased to include Japanese beech and horse chestnut, which further promoted the spread of persimmon lacquerware and caused the rapid decline of pottery bowls. As a result, a new style of tableware was established with lacquered bowls as its basis and with ceramic ware and unglazed earthen bowls as complementary elements. Some significant changes were also seen in lacquer paint tools, such as buckets and palettes, and lacquer-collecting techniques. Moreover, the growing popularity of soups and rice poarridge, under the influence of the Zen Buddhist Sect, spurred the mass production of mortars and the spread of lacquered tableware. Another change in medieval Japan was the meaning of red lacquerware. Although it had remained popular since ancient times, its meaning changed from a symbol of the high social status of those who owned it to a reminder of Chinese lacquerware, such as red lacquerware of the Yuan and Ming Dynasties. In the 16th century, red lacquerware gained more widespread popularity, not only among artisans and merchants in urban areas but also among farmers in rural areas. This drastic change in the color symbolism seen in lacquerware and picture

rolls was a milestone in the transition towards the early modern period, representing the rise of cities and the independence of rural communities. Thus, this article insists that the production of lacquered tableware changed significantly in parallel with social changes at the transitional phase from the late ancient to medieval times as well as at each milestone of the medieval period.

Key words: lacquered tableware, undercoat of persimmon tannin, red lacquerware, wood types, rough cut, lacquer–collecting technique



1　椀（内面）　× 200



2　皿（内面，漆パレットに転用）× 200

写真 5　新潟県寺前遺跡出土漆器の塗膜分析（撮影 四柳嘉章）